

第3回（令和6年度2回目）甲賀市観光振興計画審議会 会議録

【日時】令和6年7月1日（月） 14：00～16：00

【場所】みなくるプラザ 研修室2・3

◎出席委員

名簿：別紙のとおり

◎事務局

産業経済部長 近藤直人

産業経済部次長 兼 観光企画推進課長 山本典彦

観光企画推進課長補佐 中島章宏

観光企画推進課観光振興係長 福山由美子

観光企画推進課主査 竹若紗穂

観光企画推進課主事 奥村泰雅

◎次第

1. 開会

2. 議事

（1） 第2次甲賀市観光振興計画 第3期基本計画（素案）について

3. その他

4. 閉会

次第1. 開会

甲賀市市民憲章唱和

次第2. 議事

(1) 第2次甲賀市観光振興計画 第3期基本計画(素案)について

事務局： 第2次甲賀市観光振興計画 第3期基本計画(素案)(資料1)について、概要説明。

委員長： では、質問や意見がある方はどうぞ。

園田委員： 小学生が郷土史について等、忍者について学習する機会はあるのか。

事務局： 地元の歴史文化を学ぶ時間があるが、必ず忍者について学んでいるという状況ではない。学校によって、社会見学で小学生がリアル忍者館を訪れ学習している。

園田委員： 情報発信としては、市民や近隣市町の方にも発信する必要があると思う。

堀田委員： 近隣の市民には、情報が伝わっていない。マイクロツーリズムの観点からしても、地元の方が魅力を感じるコンテンツが必要だと思う。小さい子どもがいる家庭では、お金がかからず遊べる場所を求めているので、地元の方に対しての強みになると思う。隣接に集客力がある企業があると良いのでは。すべて自力集客するよりも、効率的な集客方法になるのでは。

委員長： 5ページの「II. 誘客促進戦略」と関係してくるのでは。リアル忍者館をどう活用するかという意見がでていますが、市民向けには、どのように広報できるか。例えば、市のケーブルテレビを市民がよく視聴している等。

小山副委員長： 地域の子どもは、各小学校から見学に来ており、地域の方の来訪も徐々に増えてきている。イベントについても、体験を増やしており、夏休みも子ども向けイベントを企画している。また、リアル忍者館については、計画を立てながら、徐々に整備をすすめている。今が完成形ではなく、今後も甲賀市と連携しながらリアル忍者館を魅力的にしていこうと考えている。近隣市町の湖南市とは、東海道を中心として地酒等を活用して協力しながら事業を行っている。

また、9ページ「III. 地域活性化戦略」の④地域活性化のための多様な団体との連携促進について、甲賀ロケーション推進協議会は、市内全域のロケーションを担って多く活動しているが、忍術研究会は分野が限られているので、載せるのならば固有名詞ではなく全体を示す表現にした方が誤解を招かないと思う。

事務局： 公民連携の中で、連携する多様な団体の例として挙げていたが、全体的な表現や他の団体名の追記をする等、誤解を招かないよう表現を再検討する。

奥田副委員長： 全国でたくさん忍者に関する施設があるが、甲賀市はリアル忍者、本物志向である。ただ、観光客が何を求めているか、本当にリアルを求めている観光客なのか、パフォーマンスや手裏剣投げを求めているのか、甲賀市が向性を定めることが一番大事だと思う。また、地域の人が地域の歴史や文化、産業に自信と誇りを持ってもらわないといけない。甲賀市民一人一人が自然と発信・誘客してくれる。

大河原委員： 海外から来た方をリアル忍者館に案内させてもらうことがある。英語や韓国語の表記がないものもあり、何を見たらいいかわからず、次の施設へ移動してしまうことがある。1ページ「I. 魅力向上戦略」の②忍者の里の雰囲気醸成の中に「サイン整備」とあるので、リ

アル忍者館だけでなく、まち全体のサイン整備がわかりやすくなればいいと思う。忍者の里ではないが、貴生川駅のホームに「ようこそ信楽へ」という大きな看板がある。貴生川駅のホームは信楽ではないのに、「ようこそ信楽へ」という文言はわかりにくい。また、同じく1ページ「I. 魅力向上戦略」に③観光インフォメーションセンターの機能強化という部分があるが、バスツアーではない観光の起点は貴生川駅だと思うので、インフォメーションセンターが貴生川駅にあれば良いと思う。そのような計画はあるか。

事務局： 貴生川駅のインフォメーションについては、以前から要望があるが、人が常駐するのは難しい。人が常駐するのではなく、ICT等の活用も視野に検討していきたい。建設部局でもインフォメーション機能も含めた駅前再整備について議論している。

委員長： この話は、I.魅力向上戦略（3）効果的なPRの推進③ICTによる地元情報の発信にかかってくるかと思う。JRが通っていない地域や本数が少ない地域によっては、バスが停まるところに人が集まるようになる。貴生川駅は、今後どのような位置づけになっていくのか。

事務局： 貴生川駅は、JRだけでなく、信楽高原鉄道や近江鉄道の乗換駅となっており、町の中心と考えている。動態調査でも人が集まる場所となっているので、二次交通も含め、そこから周遊してもらえるしくみをつくっている。

委員長： 和歌山の場合、駅の中に貸出スペースがあり、土産物販売をすると同時に観光案内をしているという事例もある。様々な活用方法を含めて、駅前再整備の方向を検討していただいていると思う。

山本委員： II. 誘客促進戦略（2）誘客事業・イベントの開催③東海道宿場への誘客促進にも「道の駅あいの土山」のワードがあれば良いのでは。

委員長： 道の駅も、観光情報を発信する拠点にはなるか。

事務局： 拠点になる。

委員長： では、そのことも計画内に盛り込んだ方がいいのでは。

事務局： 計画案に盛り込む。

委員長： 二次元コードの活用については、広がっているか。

事務局： 日本遺産の構成文化財の看板に貼っている。

委員長： 市内のレストランに「アプリのいない観光マップ」という二次元コードを読ませるポップが置いてあった。あれは、多言語化もできるのか。

小山副委員長： デジタルマップは、現在の多くの方に活用いただいている。1年間の試用期間を経て、多言語を含めて甲賀市観光まちづくり協会が費用負担していく予定だ。その他、二次元コードの活用については、ポスターや広報物などに広く使っている。

奥田副委員長： 今後は、通訳ではなく、観光ガイドの育成をすべきではと思う。

事務局： インバウンドの受け入れに対するガイド育成について、市も必要性を感じている。多言語もできて、ガイドもできる方の人材が難しい。昨年度、大阪城公園でイベントを実施した際、日本遺産「忍びの里」に関するインバウンド向けのインフォメーションブースを設け、非常に盛況だった。そこで通訳をしてくれた方は、大阪の船場のDMOに所属されている方で、もともと海外のツアーガイドをされていた方たちだった。その方々にレクチャーしてい

ただけないか等を考えている。どんなやり方になるかはまだ確定していないが、多言語ガイドの育成は実施していくべきと考える。

委員 長： 5 ページの「Ⅱ. 誘客促進戦略」⑤体験プログラム及び体験型ツアー造成にも関連してくると思う。現在、少人数で3～4日位歩いて案内するようなアドベンチャートラベルが盛り上がり、高付加価値な旅行を推進している地域がある。忍者や信楽焼等で造成していくのも良いのでは。

小山副委員長： 昨年度から、市委託事業の周遊型観光促進事業の中で、信楽町観光協会と連携し、インバウンドの体験プログラム造成に取り組んでいる。昨年度作成した旅行会社向けの提案書やPVを活用して、誘客に取り組んでいきたい。

先ほどから話がでていた多言語対応の観光ガイドについて、甲賀市観光まちづくり協会としても、有料ガイドを育成し、組織化するために動き始める予定だ。また、翻訳アプリの活用セミナー等を実施していく。体験プログラムツアーについては、観光庁からの補助金を利用して、忍者を感じられる体験を造成し、3泊～4泊のツアーを考えていく予定である。

委員 長： 甲賀市の誘客を考えるときに、京都を訪れている寺社仏閣に興味のある人もターゲットになるのではないかと。京都在住で外国人を案内しているガイドに、京都は人が多すぎるので、選択肢として、ゆったりするなら甲賀はどうか、という売り込みも可能ではないか。

事務局： 10 ページの「Ⅲ. 地域活性化戦略」(3) 広域連携に盛り込めたらと思う。

大河原委員： 先日、国際交流協会として、甲賀市観光まちづくり協会と通訳ガイドの件について話をした。外国語で地域の観光資源を説明できるガイドを、市内や近隣市町から育成していくのは非常に難しい。今は翻訳ツールが豊富にあるので、必ずしも通訳ガイドが必要ではない。せっかく甲賀市に来てくれた人が何を求めているかと考えると、完璧で正確な通訳やガイドを求めている訳ではないと思う。その人の人柄や雰囲気やふれあいを求めてきているのでは。完璧な「ガイド」ではなく、「サポーター」のようなイメージで、やさしい日本語によるガイドも取り入れていくことで、人材も増えるのではないかと。市民の意識を高めるためにも、やさしい日本語による観光ガイドも検討していくのはどうか。

委員 長： 2 ページ「Ⅰ. 魅力向上戦略」③市民主体の観光まちづくりの促進と地域の誇りの醸成に関わってくるのでは。やさしい日本語で語れるということは、おもてなしの部分でも理想形になる。

奥田副委員長： 大手旅行会社が京都や大阪に滞在しているインバウンドの方向けに琵琶湖周遊ツアー等のインバウンド専用の日帰りバスツアーをしている。観光協会では、個別の問い合わせ対応や保険等が難しいので、そのようなツアーを実施している大手旅行会社と連携しながら、インバウンド対応をしている。インバウンドが多いところには、日本の観光客が少なくなることが心配である。現在は、インバウンドの誘客はしつつも、国内からのお客様が基本と思って受け入れをしている。

委員 長： インバウンドの方がたくさん来ている地域は、意外とまばらである。インバウンドの方は世界観が違うので、これまで商品にならなかったものが商品になるという部分に魅力がある。例えば、日本人の方が泊まりに来ないような場所でも、外国人はそこにある一棟貸しの施設に泊まりに来る可能性がある。放っておいたらなくなってしまうかもしれないものに、

新しい世界観が入ると光が当たり再生するという可能性がある。滋賀県でも、自転車やトレッキングは増える可能性がある。

事務局： 基本施策について、11 ページ「Ⅲ. 地域活性化戦略」（４）持続可能な観光推進体制の構築について修正している。当初は国のDMO認定を目指していたが、状況も変化しているため、持続可能な推進体制と変更させていただいている。

委員長： では、次に資料2と資料3について、事務局から説明をお願いします。

事務局： 第2次観光振興計画 第3期基本計画 目標指標（案）（資料2）・観光振興計画修正箇所抜粋（資料3）について、概要説明。

委員長： 市民意識調査の「自慢できるか」の文言について、少し慢心しているイメージがあるので、誇りに思うか等、検討が必要では。

いつも思うが、数値目標は伸びていくものなのか。基本的な考え方は、人口が減った分、社会維持のために経済消費を補完する観光客を増やすという考えである。総合計画の中で人口減に伴う経済消費を補完するためにこれだけ観光客数が必要だ、という算出なのか。それとも、今までの推移を元にとすると、このように推移する予定なので、それに対してどう準備していくかというものなのか。

事務局： 難しいが、長年甲賀市は「ものづくりのまち」としてやってきた。しかし、人口減少時代の中、若者や女性の働きたい場所やシビックプライドの醸成も含めて、観光産業活性化による地域活性化を目標としている。甲賀市は観光資源に対して観光客が少なく、ポテンシャルがあると思っている。

委員長： 現状の観光客数等の数値がポテンシャルに対してまだまだ少ないから、それを近づけていくということだろう。

園田委員： 【進捗評価指標】第3期基本計画の4年間(R7～R10)の目標値の変更案に記載してある「日本遺産忍びの里の認知度」は、市内の認知度か、市外の認知度か。

事務局： 今回挙げている数値は、市内でのアンケート数値だが、市外で実施した調査もある。文化庁に申請している日本遺産のKPIでは、市内の認知度を挙げているため今回は市内の認知度とした。

園田委員： 市外で認知された結果、市民にも認知されるという順序かと思う。地域内での活性化も大事だが、市外での認知度向上に力を入れてほしい。

委員長： 数値目標は決めたうえで、附随したデータについて載せることは不可能ではないと思う。

奥田委員： 新型コロナウイルス感染症の影響が出る前の2019年の数値は出ていないのか。数値は戻ったのか、戻っていないのかが知りたい。また、人数も大事だが、甲賀市内で落ちたお金についてのデータはないのか。

事務局： 新型コロナウイルス感染症の影響が出る前に、ちょうど信楽が舞台の連続テレビ小説「スカーレット」が放映されていたため、その時期だけもともと多かった。「スカーレット」の前年が314万人なので、同じくらいに戻っている。消費額については、【進捗評価指標】②の誘客促進戦略進捗評価指標で挙げている。

委員長： 消費額について、税収等で、実数的なことが見えることはあるのか。

事務局： 消費額の出し方は、県が数年に一度実施している消費額に関する現地での聞き取り調査で

算出された単価を使っている。

委員長： それについて理解するが、市内の宿泊施設に何人泊っていて、単価がどれくらいか等はわかるか。そのような実際に近い数字を拾っていき、甲賀は宿泊やお土産など、何が弱くて何を強くしていく必要があるかを将来的に考えていく必要があると思う。

事務局： 市や観光協会で実施したモバイルアンケート等で、いくら消費しているか聞いているが、実際は県の消費額よりも多い。実際はもっと経済効果があるのかもしれない。そのあたりは、事業者の方々にも協力をいただきながら、金額的なところを拾っていければと思う。

委員長： 例えば、ゴルフ客とそれ以外の方で、使う金額の違いはわかるのか。

事務局： 市内のゴルフ場について、現在は平日に昼食付で6,000円～7,000円くらいから利用でき、場所によっては、平日でも15,000円くらいの場所もある。このような状況だが、ゴルフ客よりも一般の観光客の方がお金を使っているイメージがある。信楽では、ランチやカフェ等、観光地価格となっている。施設への入場やお土産の購入等を考えると、日帰りでも10,000円は消費していると思う。

大河原委員： ①魅力向上戦略進捗評価指標の「甲賀流リアル忍者館周辺関連施設の年間来館者数」について、「周辺関連施設」の文言を抜いているが、周辺関連施設の整備計画があるのか。周辺関連施設とはどこを指すのか。また、甲賀流リアル忍者館と道の駅あいの土山という個別の施設の指標となっている。数字を出すためには、一定の範囲等ではなく、施設を絞った方がいいからなのか。

事務局： 「忍者を核とした観光拠点施設整備計画」がある。一次と二次と段階的に整備をわけており、一次は甲賀流リアル忍者館を整備するという計画、二次は忍びの里プララの周辺について、観光公園のような広場機能や忍者ショーができる芝居小屋等の計画案であった。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、現在施設整備の見直しについて、検討委員会にて今後の方向性を諮っている。当初は周辺の観光公園に来ている人も含めて、10万人としていた。その整備が止まっているため、リアル忍者館に限った数値にしたいと考えている。

特定の施設に限った指標の設定について、リアル忍者館は観光の起点としての総合観光インフォメーションセンター、道の駅あいの土山については東のゲートウェイの位置づけとして、指標にあげさせていただいている。

白石委員： 信楽焼を伸ばしていくのか、忍者を伸ばしていくのか等、方向性を絞った方が、結果が見えやすい。計画では、観光都市として何をしていくか具体的にしていっていった方がいいのでは。

委員長： その考え方は大切だと思う。11ページ「Ⅲ. 地域活性化戦略」（4）持続可能な観光推進体制の構築に修正となっていたDMOとは、その地域に責任を持って民間主体で司令塔になっていくような組織である。では、変更後の持続可能な観光推進体制は、どのような体制なのか。

事務局： 組織が先なのか、体制が先なのかということはあるが、誰がイニシアティブをとって進めていくか、新しい組織なのか、既存の組織か、方向性も含めて検討していきたい。DMOが何かということについて、人によって認識が違うので、毎年研修を行いながら共通意識が持てるように取り組んでいる。

委員長： 観光協会の中でも、今の組織ではできないこと等、困りごとがあるのではないか。その解

決を担う組織が必要だと思う。和歌山のDMOがなぜ作られたかという、農村や漁村との連携が必要だったからだ。農家民泊や漁村体験等が主要な観光資源だったが、彼らは観光協会には属しておらず、それをつなげていくために、DMOを考えた。甲賀についても、豊かな田園等があるが、担っているのは高齢者で、子ども達は都会に行っている。では、代わりに誰かが行う仕組みをどうつくるか。それが農業なのか、観光なのか。その他困りごとは各分野いろいろとあると思う。各分野の人がそれぞれ困りごとを話す場が必要。問題点を持ち寄りながら、解決していく場が必要。「推進体制の構築」という表現は具体性がないから、進まない気がしていて心配である。

現状、甲賀にそのような困りごとを話すような組織はあるか。

小山副委員長： ないように思う。甲賀市はもともとのづくりの町である。そのため、観光に対する考え方が人それぞれ異なる。観光客に来てほしい人も、そうでない人もいる。観光の産業化だけでなく、地域の誇りや伝統を大切にすることを育むということも非常に重要だと思う。

委員長： 空き家問題や人口減少、産業の空洞化など、地域の中に困っていることがあって、それを観光で解決できたと思う。甲賀市全体としてみんなで推進していく体制が必要ではないかと思うが、今の段階で足りないところがあるか、もしくは十分にできているか。そのあたりはどう思うか。

奥田副委員長： もともと日本はものづくりの国であったが、ものづくりが行き詰ってきたため、交流人口を増やして観光でお金を落としてもらわないといけない状態。甲賀や信楽は世界でここにしかない技術を持った会社もあると思う。それを一つの観光の目玉にして、その中で忍者や信楽を押ししていく等、産業界と連携してそういう技術をピックアップして線で結んでいくということも一つのやり方だと思う。

事務局： 総合計画の話もあったが、いろいろな施策は、人口減少をいかに食い止めていくか、ということが中心となっている。例えば、貴生川駅周辺の再構築。その他に、交流人口、関係人口の増加があり、甲賀市に興味をもってもらえるツールの一つが観光だと思っている。市の資源は忍者や信楽焼、ゴルフ等いろいろあるが、そのチャンネルを増やしていくことで、関心を持ってもらい、その内何割かの人に来ていただくことを目指す。尖った部分もちろん大切だが、観光振興計画はやはり全体的な話になると思う。下位計画をつくるとすれば、尖った部分の計画をつくる可能性はあると思う。観光振興計画は、観光分野の中での総合計画となるので、網羅的な計画になってしまう。

DMOの話もあるが、両観光協会で分野によって役割分担した上で連携していただいている。市の観光行政はそれを支援させていただいている。我々が先頭を切って各協会の方についてきていただくのではなく、主体は両観光協会です。市は支援や情報共有をさせていただくことだと思っている。農業については、衰退の一途を辿っているところだが、市では若い新規就農者が増えている。米は少ないが、イチゴを中心とし、果樹は県内でもトップクラスの新規就農率である。農業については、就農者離れが戻りつつある。最終的に、行政として役割が果たしていけるか。農業、観光も含めた産業が基本にあり、そこに観光が成り立つという考え方かと思う。

次第3. その他

次第4. 閉会

以上 16時00分終了